

Yamaha
Guitar
Development

世界最高水準の
エレクトリックギターをプロデュースする
というポリシー。

Photo: YGD U.S.A. Staff with PACIFICA

歌わない木は使わない。

Body プロ・ギタリストがしばしば口にする、同じモデル内における鳴りの当たり外れは、クラフツマンにとって恥ずべきことである。木材は、個々において性質が違うからというのはい訳にならない。大切なのは、ボディの鳴りを生かした音創りを徹底するという意志だろう。ヤマハは、歌う木を選択する。近頃見受けられる、P.U.のみで音を創る手法を取るつもりはない。歌うか、歌わないか。材の選別は2段階にわたる。まず、伝播速度の機械測定。ギター同様、響板を持つ管楽器の音響測定技術に応用した独自の手法である。数値という客観的な指針を導入することで、クラフツマンの才能だけに頼っていたクオリティ・コントロールは、その信頼性を飛躍的に高める。次の段階は、音楽を語れるクラフツマンの目と耳だ。経験から培われた独特の勘は、マシンには真似のできない極めてアコースティックな視点から、材を選び出して行く。ここにおいて、ヤマハの求めるクオリティを持つボディ材だけが揃う。このボディに対するアプローチは、山本恭司、野呂一生、ジョン・パトリックのモデルに導入された多層構造ボディという新たな手法にも生かされている。なぜなら、個々の材の性質を知り尽くしていないければ、多材の組み合わせで音をコントロールすることなどできないからだ。そしてなによりも、アーティストの耳は、歌わない木を決して許さない。

握り方にはパターンがある。

Neck ネックは、握りやすければいいのではない。なぜなら、プレイヤーは、握ることが目的ではなく、弾くために握るからである。よって、ヤマハは、プレイ中の握りのフォームには様々な型が存在するという事実をもとにネックをデザインする。すなわち、ネックをひりひりて異なる手の形にフィットさせるのではなく、演奏するジャンルやプレイ・スタイルにフィットさせるのである。ギター製作の歴史の中で、ヤマハは、理想的ないくつかのネック・バリエーションをデータとして蓄積している。このデータは、ネック形状、フレット・タイプ、指板材、指板面アールの組み合わせすべてが考慮され、プレイヤーのグリップを完璧に網羅するものとなっている。コンテンツボラーなハードロック・ギターRGXシリーズを見るだけで、ヤマハが膨大なデータの中からモデルコンセプトに合わせた意識的な選択をして、ネック回りのスペックを決定していることが分かるはずだ。ワイド&シン・グリップ、350R、24フレット、そしてサテンフィニッシュなど、すべてが進化を続けるハイテクネックを弾きこなすことをテーマに設定されている。ヤマハは、あなたの手の形は知らない。しかし、あなたの握り方は知っている。

何も塗っていないように塗る。

Finish 木の鳴りだけを重視するのであれば、ギター塗装は薄ければ薄い方がいい。しかし、今までの塗装は、色味や光沢という見た目のカラーリングを生かそうとするあまり、ボディ材が奏でる歌声まで塗り込めてしまっていた。ヤマハは、楽器塗装の長い歴史から、ギター・フィニッシュに関してのひとりの結論を導き出した。木が、気が付かないように塗る。つまり、木材に異なる層を作り出すことであるフィニッシュにおいて、塗装膜を限界まで薄くし、カラーリングのクオリティを維持しながら、材と一体化させるのである。このセオリーを徹底させることにより、ギターを美しい色で仕上げながら、美しい音で鳴らすことができる。セミオーダー・システムにおいて、ラッカー・トップおよびスペシャル・フィニッシュを選択可能にしたのは、このようなヤマハのギター塗装哲学の具現化である。材に浸透し馴染むことでボディ鳴りを存分に引き出すラッカー独特のクオリティは、工程やコストへの影響を補って余りある魅力である。また、ヤマハが独自に開発した特殊合成塗料を使用するスペシャル・フィニッシュは、硬度と耐久性をキープしながら驚異的な薄さを実現したロック・ギターにとってのニュー・プレステージ・カラーといえる。さらにクラフツマンのハンドワークによる薄塗りメソッドは、耐久性と光沢に価値を見出だされていたウレタン・トップを、新たにサウンド・クオリティというステータスのもと存在させることができた。カラーリングの美しさでフィニッシュを選択すれば、あなたは同時に優れた音響性能をも手に入れることになる。

パーツもすべて楽器である。

Hardware 過去のギタリストたちは、ギター・パーツに無関心すぎた。ハードウェアを機能だけで選択していた。ギターは、エンドピンからペグまでが、鳴り、響きあい、サウンドを創っている。ヤマハは、ハードウェアを、ギターの機能性のみを語る一部品ではなく、楽器そのものと捉える。そして、ボディ材を規準にそれぞれのレゾナンスを設定する。これにより、ギター全体の鳴りは統一感を持ち、ナチュラルなトーンを得ることができる。例えば、DiMarzioピックアップや、フロイドローズ・ライセンスのオリジナル・ロック式トレモロ・ユニットRockin'Magic-Pro IIIなど、すでに十分な評価を得ているパーツを搭載しても、レゾナンスの統一という概念が欠如していれば、ギター製作者やプレイヤーの意図から外れたアンバランスなサウンドを生み出すギターになってしまう。そのためすべてのパーツは、搭載機種のプロダクト・コンセプトとのパーフェクトな融合のために、さらなる進化を求め、リファイン/チューニングを施してから組み上げることをセオリーとしている。この、パーツ単体の完成度だけでなく、それぞれのマッチングを計算しながら全体を構築するヤマハ・メソッドは、ギターの完成度に対する限りない追求に他ならない。